



2022 年 5 月 2 日
社会福祉法人清流
さつきの家
施設長 小川裕子

「さつきの家」だより

5 月です！さつきの家」が、ここ五月が丘に開所して 1 か月経過しました。たった一ヶ月ですが、いろいろな出来事があり、記憶に残る 2022 年 4 月でした。7 名の仲間が、毎日元気いっぱい通ってきてくれています。この人達の笑顔のためになら、頑張れます。

～障害福祉に馳せる私の思い～

私は、二人姉妹の長女として育ちました。でも、本当は 2 番目です。姉がいました。出産時トラブルで、生後 1 週間で亡くなりました。私が子どもの頃、母は時々、遠い目をして姉を懐かしがっていました。「瞳の大きい綺麗な子だった。」「身体中、傷だらけになって可哀想だった。」（なかなか生まれず鉗子分娩で傷だらけになったんだね。）それでも、必ず最後には自分に言い聞かせるかのように、「あの子は死んで、良かったんよ…。」と言っていました。子ども心に、「死んで良い命ってあるのか…な。」と、疑問でした。

今思うに、その答えを見つめたくて、私は障害児保育にのめりこんできたように思います。大人になった私に母は、死んだ姉の話はしませんでした。（私も聴きませんでした。）それなのに、晩年、認知症を患った母は、自宅に来てくれる優しい作業療法士さんには、泣いて姉を失った悲しみを訴えていました。（忘れられない記憶…。）もっと母の素直な思いを生前の母から聴けば良かった、と己の親不孝を悔やみます。「母さん、死んでしまっただけで良い命なんて無いって、ちゃんと分かっていたよね。どんなに重い障害があったって、生きていて欲しかったよね。理解してあげられなくて、ごめんなさい。自分を納得させてくれて言っていたんだよね。可愛い赤ちゃんを失って悲しかったね。傷だらけにされて悔しかったね。飲んでもらえないおっぱいが張って痛かったよね。」

「さつきの家」には、重度の障害のある仲間たちも通ってきています。彼らは、言葉は発しません。歩けません。でも、しっかり生きています。私は、彼らと共に歩みたいのです。輝いている命を、みんなの中で、温かく見守り続けたい。母や姉の思いを「今」に生かしていきたいです。障害の重い仲間の瞳は、今日も私たちを励ましてくれます。「みんなと一緒に楽しいよ。」「あー、おもしろかった！」って。さつきの家が、誰をも励ます場になりますように。地域の皆様に愛される場になりますようにと、願ってやみません。